

高麗山県有林（高麗山県民の森）史異聞

中島浩一 *

Kouichi NAKAJIMA*

I はじめに

本稿は平成15年3月に刊行された、神奈川県自然環境保全センター自然情報第2号で著者が記した「高麗山県民の森森林植生変遷史」で報告できなかった高麗山に関する各種記録等を編集したものである。

今回は、前回の報告執筆にあたって収集した資料の他に新たに、旧林業指導所の職員でおられた増子忠治氏より、再度の聞き取り調査を行うとともに、氏所蔵の資料を参考にテーマ毎に深く掘り下げて執筆を行った。

II 高麗山の歴史と文化

1 高麗山八俣山における虎御前の悲恋物語伝説

時代は平安末期から鎌倉初期にかけての話で、一説には現在の平塚市山下に住んでいたといわれる藤原実基郷：通称山下長者のもとに、1175年（安元元年）寅の月、寅の日、寅の刻に誕生した娘が「三寅御前」と名づけられ、長じてからは「虎御前」と呼ばれるようになった。容姿端麗、歌舞音曲に優れていたので当時の周辺有力者の宴席に招かれることが多かったということである。そうした中、日本3大敵討で有名な「曾我物語」の曾我十郎祐成と恋仲になり、十郎に宴席上で得た仇敵の工藤祐経に関する情報を密かに手紙等で伝えていたということである。そして、建久4年（1193年）、源頼朝（1147～99）が富士山の西麓で巻狩を催した際に、曾我十郎祐成、五郎時致兄弟は父親の仇敵である工藤祐経を討ち果たしたものの、兄弟は殺されてしまった。それを知った「虎御前」は悲しみのあまり19歳の若さで出

家して尼となり、長野の善光寺をはじめ全国の霊場を行脚し、晩年に現在の「ケヤキの広場」（寺久保、寺窪）にあった高来寺に籠って兄弟の菩提を弔ったという。彼女は嘉禄3年（1227年）に亡くなり、彼女の生まれ育った大磯の地と兄弟の最後の地である富士方面を望める八俣山に葬られたという伝説がある。実際、八俣山の南斜面で彼女の墓石と思われるものが昭和35年頃（1960年頃）発見されているが、その後墓石は所在不明となってしまったということである。

2 北条政子が安産祈願のために高来寺へ神馬を献上した記録について

（よみ下し文）

吾妻鏡 建久三年（1192年）八月九日条九日
己酉 天晴れ風静かなり。早旦以後御台所（注1）御産の気あり。御加持は宮法眼（注2）、験者（注3）は義慶坊（注4）・大学房等なり。鶴岡、相模国の神社仏寺に神馬を奉りと誦経を修せらる。（以下省略）

（原、漢文）

（注1）：北条政子（1157～1225）（※源頼朝の妻）

（注2）円暁：鶴岡八幡宮の別当

（注3）験者：加持祈祷を行う人

（注4）：義慶坊：鶴岡若宮町国府新宿。日吉宮山王大神現霊社

注：この後、政子は源実朝（1192～1219）を出産し、鎌倉幕府第3代征夷大將軍の座につかせることとなる。高麗寺が神馬を奉納された大磯の5つの寺社に含まれることから、幕府の尊崇を得て政治的、交通の要衝として繁栄していたことがわかる。

3 島津忠綱が高麗山の山雀を將軍家に献上した記録について

* 神奈川県藤沢土木事務所道路都市部道路都市課（〒251-0025 神奈川県藤沢市鶴沼石上2の7の1）

(よみ下し文)

吾妻鏡 宝治二年(1248年)十月廿五日条廿五日戊戌 嶋津豊後左衛門尉忠綱、高麗山の山柄をもって將軍家に献ず、その色白くして雪のごとし。その聲わが国の鳥に相似ず。幕府の賞翫ただこの事なり。

(原漢文)

この記録が高麗山に関する最古の生物に関する記録である。山柄はヤマガラのことか。シジュウカラ科の小鳥。(※鑑賞用?)

4 高來寺市と山神輿

高麗寺(高來神社の別当寺。明治維新の神仏分離令で廃寺)の本尊である千手観音の祭りが高來神社の春祭りの様相になった相模国3大市のひとつに数えられる高麗寺祭、高來寺市(こうらいじまち)は毎年4月17・18・19日に実施されている。高來寺市は江戸時代から大正の初め頃までは「農具市」であったが現在は「植本市」になっている。その中で、「山神輿」の行事がある。これは高來神社(下宮)の神霊(みたま)を神輿に移し、麓から山頂の上宮(大堂)まで神輿を担ぎ上げるというもので、祭りに大勢の人が集まるために地上の穢れを避けて山頂の上宮に仮宿するのだといわれており、寛永21年(1644年)4月17日より始まったと伝えられている(徳川家康の命日に由来すると伝えられている)。神輿は祭りが終わった19日に再び山をおりる。この山神輿は平成元年(1989年)10月18日に大磯町の無形文化財に指定された。筆者は平成15年(2003年)4月17日に祭りの見学、取材を行った。強風が吹き荒れる中、午後6時になって急に薄暗くなった時、掛け声とともに重さ250kgの神輿が平手でたたかれながら台から持ち上がった。担ぎ手は若年層と中高年層が半々であったが最初は足元がおぼつかず、少しふらふらしながらの出発であった。山神輿は高麗山で一番傾斜のきつい(歩きにくい)男坂を夜間に登る。神輿は前棒が2人で後棒が4人の計6人で担ぎ、輿棒に結びつけた綱を男坂上にある大木(かつてはマツ)に括りつけて左右4~5人が一緒になって神輿を引っ張りあげるというものである。まず最初の難所が男坂への神輿の引っ張りあげだったが、担ぎ手と引き手の息が合わない、足元が滑りやすいこともあってなかなか神輿が進まない。そうこうしている

うちに辺りはどんどん暗くなって懐中電灯、提灯の明かりがないと自分の足元すらわからなくなってきた。やっと神輿が動いたかと思えば横転するといった有様で、神輿が上り始めたのはかれこれ40分以上経過してからであった。それからは、くねくね曲がった山道をまっすぐ進んでいったが、それでも2歩進んで1歩後退という状態が続いた。掛け声は物凄く、真っ暗な山中にこだました。神輿はその間、横転、ずり落ちが相次ぎ、担ぎ手はたちまち泥まみれ、人によっては怪我をしてしまい、はらはらしながら見学した。昔のようにマツ等の大木がなくなったことで、非常に作業がやりにくくなったという話を聞いた。担いで、引っ張って、横転して引き上げてを繰り返し、担ぎ手は交代しながら山斜面を泥まみれで登り、漸く午後8時頃女坂との合流点(八景、中の坊跡:僧坊跡地?)に到着した。ここで休憩をとり、御神酒、水、おにぎり、香の物(沢庵漬け)が引き手、担ぎ手、そして見学者にも振舞われた。筆者もいただいたが、満腹になるほどでびっくりしてしまった(特大サイズむすび2個と沢庵漬)。この女坂での休憩で振舞われるおにぎり運びは明治の末までは「お婿さん」と決まっていたということである。なお、見学者にはアマチュアカメラマン、外国人もいた。その後は神輿を平手でたたきながら、山道、足場の悪い朽ちた石段を一気に登った。8時半過ぎに漸く上宮(大堂)に到着、しばらく掛け声とともに神輿を担いで周囲を練り歩いた。9時近くになって漸く神輿が神社の跡地に安置され、神主の祝詞があげられたのち、9時15分頃全てが終わった。あとは歩きやすい女坂を銘々下って行った。正直なところ最初はこの取材にはあまり乗り気でなかったが、見ているうちにその迫力に感動し、時間がたつのも忘れていた。

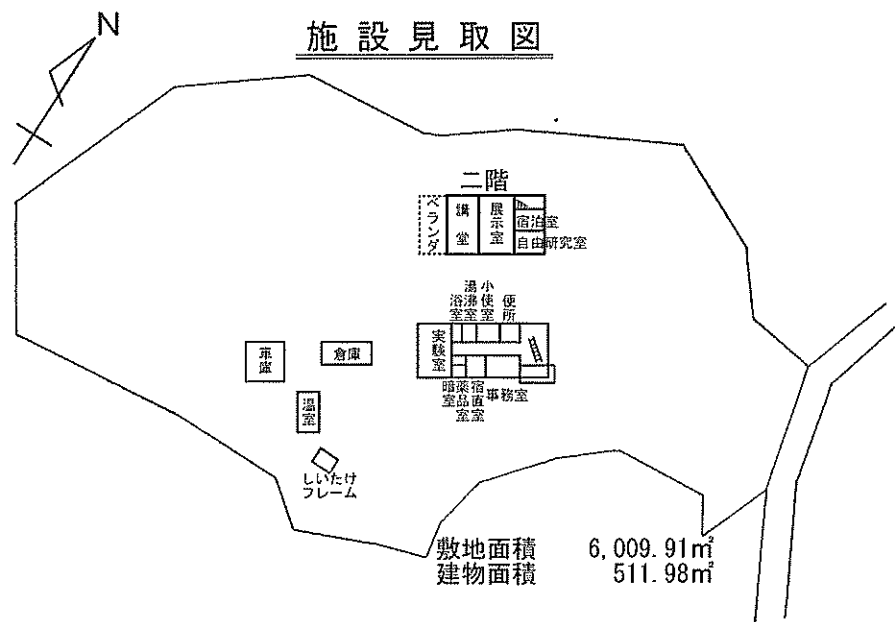
Ⅲ 林業指導所と高麗山樹木園

1 高麗山山麓に設置された「林業指導所」とその業務

高度経済成長で建築用木材需要が高まる中、県は、三保県有林(現在の玄倉国有林)を国に売却した代金の一部1500万円をもとに、今後の県内林業のあり方の研究、新たな事業等を行う機関として、昭和32

年（1957年）5月、高麗山山麓に「林業指導所（以下指導所）」を設立した。当時、スギ、ヒノキ等の建築用木材の需要が旺盛だった一方、需要が減りつつある薪炭を生産する薪炭林（シイ、カシ、クヌギ、コナラ林）等を伐採した跡地にスギ、ヒノキ等の苗木を植林していく所謂「拡大造林政策」が全国的に推進される中、県としては県内にあるスギ、ヒノキ、クロマツ、アカマツ等優良な個体群（これを精英樹という）を探し出して採穂、増殖することを推し進めた。その為指導所の職員であった、栗田善一氏、増子忠治氏は昭和33年（1958年）以降県内の山中をくまなく踏査してこの精英樹の発見、採穂を行い、穂は高麗山南斜面椎ノ木沢の奥に一時保管（湧水が湧き出していて、湿度、温度が穂の一時保管に好条件だった）された。こうして収集された穂は指導所の分室にあたる中郡地区事務所内に設けられた畑で育成増殖が行われ、県有林等への苗の頒布が行われたとのことである。指導所の分室は足柄地区事務所、津久井地区事務所と計3箇所あった。林業指導所の仕事としては他にチェーンソー等林業機械の改良、特用林産物の品種改良（栗、竹、キノコ等）、林家指導の為の普及啓蒙活動等があった。また、衰退しつつも一定の需要があった木炭生産事業については、昭和33年（1958年）に高麗山北斜面地獄沢の粘土を使用して炭窯を指導所敷地内に設置し、製炭用原木は高麗山南斜面女坂周辺のスダジイの若木を伐採

して調達した。更に良質な木炭を作るための薬剤（炭の友、塩化アンモニウム）を火入れ前に原木にふりかけるといふ触媒製炭試験を行い、良質な木炭を研究したとのことである。木炭は年間12～13俵程度（1俵は15kg）が生産され、品評会も行われ良質な木炭生産が数年程度続けられたが、一応の成果を出したということで中断されたとのことである。この時の話として当時の指導所所長であった宮沢敏雄氏が木炭生産時にできる木酢を使用して魚類の燻製を作ろうと試みたが、臭いがきつくて食用にはならず、失敗に終わったということである。この他に変わった研究として「キハダ」樹皮製薬化研究があった。林業は通常植林してから40～50年後に初めて収入を得るものであり、その間には下草刈り、枝打ち、間伐など多大な保育管理費用がかかる。そうした中で指導所は県有林事務所と合同で、県衛生部薬務課と提携して、林内に樹皮が胃腸薬の原材料となるキハダの木を植林することによって、副収入を得る手法を研究するため高麗山北斜面に昭和35年（1960年）にキハダの苗木114本を植林した。これは昭和44年（1969年）まで研究するはずだったが、キハダの樹皮の成分に副作用があることが判明したため、途中で中止されてしまった。現在は通称「キハダの広場」のエリアに点在するキハダがかろうじて当時の面影を残している。また、指導所の敷地の一部にキジの飼育、繁殖を行っていた施設があり、



▲林業指導所見取

放鳥事業も行われていたが、この業務を担当していた片平氏自身が若いとき鉄砲好きだったことから晩年その罪滅ぼしとしてやっていたとの話が残っている。

2 高麗山樹木園の整備について

高麗山山麓に林業指導所が開設されたことにより、高麗山を「樹木園」として一般に公開することになり、山の中腹を一周できるようにと散策路を開設し、眺望の良い所5箇所休憩ベンチと屑籠を設置し、案内板、指導標、植物（樹木）に名札を取り付け、径路の刈り払いも定期的に行ったので、指導所の職員として山内巡回の目的で森林監守1名を常置した。

このような配慮にも関わらず、工作物の悪戯、破壊が頻発したので昭和33年度（1958年度）に高麗山周辺の学校から樹木園愛護の標語を募集し、優秀な作品を記載した標柱50本を高麗山の各所に配置したところ、樹木園内（高麗山）も荒らされることが少なくなり相当な効果が得られたという。なお、小学校8校40作品、中学校9校47作品、高校2校22作品、合計19校109作品の応募があり、優秀作品には賞品（文房具）が授与されたという。

（優秀作品例）

（1）小学校

- ・ 植えよう折るまいこの草木、高麗の緑はみんなの宝

- ・ みんなの家から見える山、きれいにしよう高麗山を
- ・ うつくしい心の人は木を折らぬ
- ・ お山の木おらずにみんなでたのしもう
- ・ 一枝も小鳥のおうち大切に

（2）中学校

- ・ 高麗山は緑の宝庫生きた標本
- ・ 折らないで緑の自然みんなの楽園
- ・ ものいえぬ生きものにこそ愛護の心
- ・ 楽しい山登り、後かたづけてなお楽し
- ・ こま山を緑の森と小鳥の声に

（3）高校

- ・ 高麗山は郷土の誇り皆で守ろう自然美を
- ・ 高麗山は我らの園だ憩いの場とるな小鳥も草も木も高麗山を小鳥さえずる公園に
- ・ まて折るな一木一草自然の美
- ・ 若葉よく、紅葉またよく広重の名所絵にある高麗の山

現在この標柱はほとんどが消失しているが、ここに記録として残すこととする。

3 消えた高麗山樹木園

高麗山は幕末までは寺社領地として、明治以降～昭和13年（1938年）までは御料地として管理されており、森林内では植林事業が行われてきたが、昭和32年（1957年）5月に林業指導所が高麗山麓に設置



林業指導所と高麗山（昭和33年以降） 増子忠治氏提供

されてからは、これらに加え、林業や園芸に有用な樹種が試験的に多く導入された。以下にその一部を記す。

（導入種）

メタセコイヤ、センペルセコイヤ、イチイ、コノテガシワ、アスナロ、タイサンボク、モクレン、トチュウ、キハダ、ハリエンジュ、ホルトノキ、モッコク、ユーカリノキ、リュウキュウツツジ、カラタチバナ、チョウセンレンギョウ、ハゼノキ、ヤシヤブシ等

また、現在自然環境保全センター内にあるツバキの銘木は指導所において昭和30年代に埼玉県安行村（現在の川口市）にある椿花園から椿の銘品原木を1本3000円で求めたもの等のコレクションである。更に昭和39年（1964年）に東京オリンピックが開催された際に参加国の選手が自国の樹木の種子を持参してきたので、それらの播種、育種も行われた。以下にその内容を記す。

（持参された種子）

タイワンゴヨウマツ（中華民国）、チョウセンマツ（大韓民国）、インド※葉マツ（※字不判読）（パキ

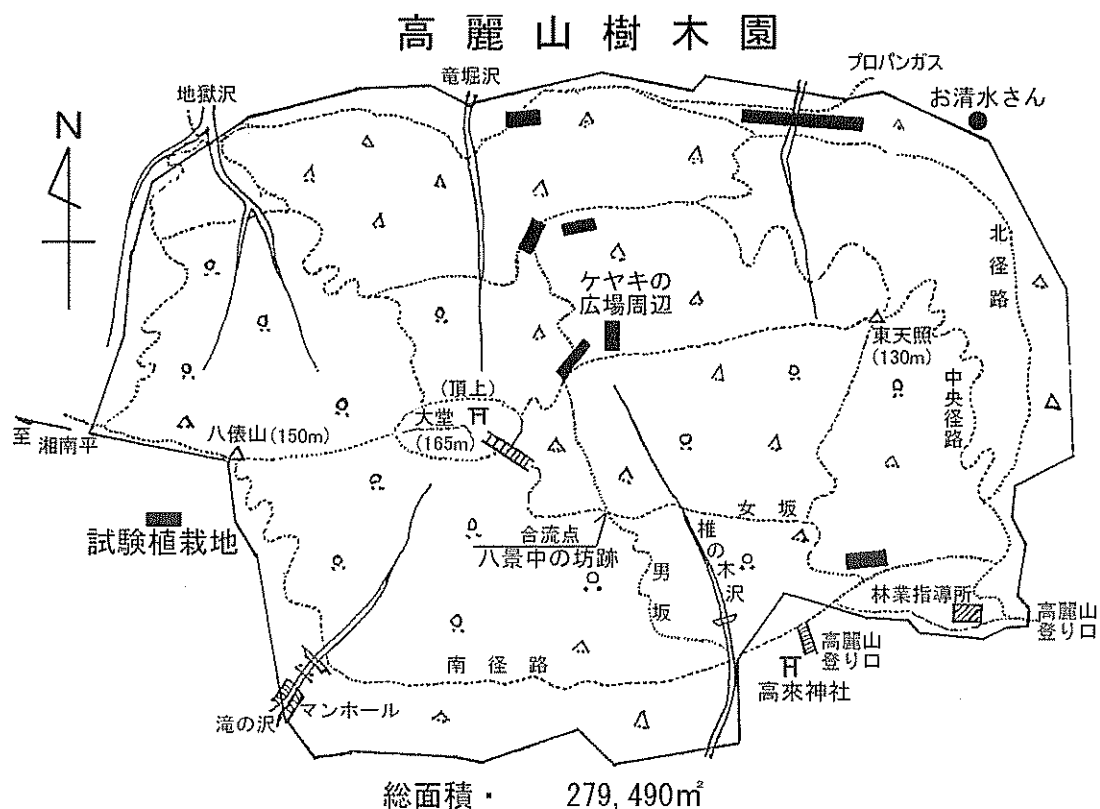
スタン）、ヒマラヤシーダー（アフガニスタン・パキスタン）、ニセスズカケノキ（ルクセンブルク・ルーマニア・イギリス）、セイヨウトネリコ（ルクセンブルク）、セイヨウサンザシ（ルーマニア）、欧州ナラ（ルクセンブルク）、欧州シデ（東ドイツ）、ニセアカシア（イタリア）、センダン（パキスタン）

しかし、昭和43年（1968年）、林業指導所が林業試験場となり、厚木市七沢（現在の自然環境保全センター）に移転するに伴って七沢へ移植されたものの以外は完全に放棄され、あるものは絶滅し、あるものは完全に山の樹木の一員になってしまい、現在では余程注意しなければわからないのが現状になってしまった。

IV 高麗山の植物相

高麗山の植物相は相模湾に面した県指定天然記念物である南斜面と大山や厚木に面した北斜面では異なっている。

南斜面は江戸時代以降大きな伐採が無いため、土



▲高麗山樹木園地図（昭和33年（1958年））

地本来の自然状態がよく保たれ、スダジイ、タブノキの大木を中心にウラジロガシ、アラカシ、カゴノキ等の常緑広葉樹が茂り、その中にケヤキ、ムクノキ、イロハモミジ等の落葉広葉樹の大木やモミ、カヤといった針葉樹の大木が混在している。中～低木相ではシロダモ、アオキ、園芸品種の元になっているヤブツバキ、神事で使用するヒサカキ、枝に刺針のあるニセジュズネノキ、冬期に赤い実のなるマンリョウやカラタチバナ等が茂り、その中に高麗山が自生地北限となるモクレイシが点在している。草本相ではキチジョウソウ、ヤブラン、ヤブミョウガ、ウシマソウの群落やオオバノイノモトソウ、イノデ、ベニシダ等のシダ植物の群落が見られる。なお、林中にスギやヒノキの大木が点在しているが、これは江戸時代～明治時代に植林されたものである。

北斜面では戦中・戦後に森林伐採が行われた関係で、イヌシデ、コナラ等の落葉広葉樹林やスギ、ヒノキの植林地が大面积を占めており、大木は少なくケヤキの広場周辺や尾根沿いにケヤキの大木が散見される程度である。中～低木相では常緑広葉樹であるタブノキ、アラカシ、ウラジロガシ、シロダモ等の若木やアオキ、カゴノキ、モクレイシが多く、将来的には南斜面同様の森林に遷移が進むものと思われる。草本相ではイノデ、ベニシダ、リョウメンシダ等のシダ植物の群落やヤブレガサ、ニリンソウ、黄色い花を咲かせるミヤマキケマン、ワサビの仲間であるユリワサビがみられる。ケヤキの広場周辺ではキツネノカミソリの群生地がみられる。

V 高麗山逸話

1 「お清水さん」のこと

高麗山には飲料水、生活用水、農業用水として長年親しまれた「お清水さん」という湧水が、高麗山北斜面県道公所大磯線沿いにあるバス停「高麗清水」近くにある。現在のケヤキの広場に高麗寺の江戸時代初め頃まであった僧坊にあたる寺窪（寺久保）坊に住んでいた僧侶の生活用水としても利用されていたようである。当時「鈴」をつけた黒牛（但馬牛）がお清水さんの傍らにたたずんでおり、道行く人が黒牛に括りつけられた水桶に水を汲むと、何の指示もなく黙々と黒牛はそれを寺窪（寺久保）坊へ運ん

でいったという話が残っている。また、この清水で眼を洗うと眼病が治るといい、病が治ったことに感謝する石碑が存在している。残念ながら現在は湧水量が激減し、汚濁も激しいただの水溜りになってしまった。

2 実録：モウソウチク 67 年寿命説

何時の頃かは不明だが、横浜市八朔町（※現在の横浜市北八朔）に住んでいた「斎藤尚」氏宅のモウソウチク林が開花し種子をつけた後に枯死してしまった。県は、牧野富太郎（1862～1957）主催の横浜植物会が種子を播種、発芽させて苗にしていたものを譲り受け、指導所の敷地の一角に植栽していたところ、別の場所でも同様に種子発芽後67年目にすべて開花結実し、枯死してしまった。現在この時採取された種子から発芽したモウソウチクが七沢の自然環境保全センターに移植されて現存している。このモウソウチクも67年目になると開花し、種子をつけて枯死するのだろうか。今後の動向が注目される。モウソウチクに花が咲くこと自体が非常に珍しく、その開花に関するメカニズムはまだ不明な点が多いという。

3 高麗山の別名：ペテン山

江戸時代、江戸日本橋から相模国に入り東海道をひたすら西へ向かって歩くと最初に見えるのが高麗山で、その大木の茂る険しい山の様子から、その手前平塚宿の旅籠では、泊まろうか否かと躊躇する旅人達に、ここから小田原宿までは4里（16km）もあるし、これからずっと目の前にある山々が続くのですよとウソをついて泊まるようにしむけていたという話が残っており、旅人をペテンにかけることから高麗山は別名ペテン山と言われていたという。

4 「男坂」に設けられた柵・鎖の撤去騒動について

昭和46年（1971年）、高麗山で県民の森（自然休養林）事業が行われた際に、ハイキングの利便性を考え、高麗山では一番傾斜のきつい散策路である「男坂」沿いに擬木コンクリート製の柵136本を設け、鎖で連結してしまった。ところが、毎年4月17日に行われる山神輿を行う際にこの柵と鎖が邪魔になることが判明し、地元関係者は施工した当時秦野

にあった県有林事務所に強く撤去を求め、翌昭和47年（1972年）4月13日、漸く特に邪魔になる50本の柵と鎖が施工後1年もたたずして撤去されるということになった。このことについて県はこの柵を作る際に地元代表の意見を聞いたが、「神輿は担ぎ上げるものとばかり思い込み、まさかロープで引き上げるとは知らなかったので、高さ70cmの柵なら邪魔にならないと思っていた」という、事前に祭りを一回でも見学した上で計画していればこのようなことは起こらなかったというとんだ不手際をおこしてしまった。かくして祭りは滞りなくおこなわれ、地元関係者をほっとさせたのであった。

5 実録：「昭和39年度高麗山巡視日誌」

高麗山は概ね1日に一度は必ず林業指導所の職員が高麗山内の巡回を行って散策路、工作物の異常点検、不審者の取り締まりが行われていた。なお、昭和39年度（1964年度）の「高麗山巡視日誌」が保管されていたので日にちを追ってその概要を記す。

（昭和39年）

- 4月13日 前日が日曜日であったせいか径路周辺、東天照、八俣山、大堂の各箇所が相当汚されていた。なお、17日～19日まで高来神社のお祭りが行われるので19日以降にゴミ屑整理を行う予定。本日平塚市（※字不判読）小学校の6年生約250人が高来神社→八俣山→湘南平→八俣山→大堂→女坂→林業指導所のコースを植物の自然観察の為訪れた。帰路、当所の水道、トイレを使用した。
- 4月14日 高麗山と民有林の境（※場所は明記されていない）で「かすみ網」を発見、大磯警察署員に事情説明の上、引き渡した。
- 4月18日 高麗山南斜面の径路沿いのアオキ、ニセジュズネノキの稚樹を引き抜いて持ち帰ろうとした人を見かけた。樹木園の主旨を話して注意した。
- 5月14日 千歳中学校の生徒約400人が高麗山樹木園を利用した。
- 5月27日 屑籠が元の位置からずらされ、放り出されてしまった。樹木にくくりつけた名札が盗難に遭う。夏が近くなり草の繁茂著しく歩道の草刈が必要かと思われる。
- 6月1日 指導標がたびたび悪戯されて非常に困る。
- 6月2日 東天照へ通じる道の途中で男性の自殺死体を発見、警察に届け出る。（※翌日には自殺者の身元判明）
- 6月4日 高来神社宮司より、最近クマザサを採取する人達（平塚の寿司屋）が多くなっているとの注意があった。特に日曜日に多いとのこと。早速小田島監守に連絡した。
- 6月18日 東天照の下で「マムシ」を取り押さえる。（※このマムシを取り押さえる記述は随所にみられ、高麗山にはマムシが多いことがわかる。筆者も見たことがある。）
- 9月22日 高麗山歩道の樹木に名札130枚を取り付けた。
- 9月29日 高麗山歩道の樹木に名札120枚を取り付けた。
- 10月2日 椿の実を採取した。（※播種用）
- 10月16日 カマツカ、エゴノキの種子採取を行った。（※播種用）
- 10月30日 富士見小学校生徒300名の入園があった。（ハイキング）県林務課の樹木園視察も行われた。
- 11月2日 「かすみ網」が男坂へ登る途中に張られているのを発見し、大磯警察署へ通報した。同日現場に現れた27歳と22歳の男性店員が現行犯逮捕された。なお、この2人が今まで自宅に持ち帰っていたメジロ31羽、ヤマガラ7羽を高麗山中に放鳥した。2人は販売目的で捕獲を行い、一週間くらい前から捕獲を繰り返していたとのことである。
- 11月4日 高麗山中のゴンズイ、スダジイ、カマツカ、アラカシの種子を採取した（※播種用）
- 11月16日 高麗山南斜面の椎ノ木沢付近の造林地で何者かがスギの木（長さ3m、径4cm）を盗伐しているのを発見、取り押さえようとしたが逃げられてしまった。
- 11月24日 平塚市平塚でイノシシの子供（体長80cm、体重12kg）が古井戸に落ちているのが発見された。このイノシシ、高麗山付近に生息していたものが餌を求めて花水川を渡って対岸の平塚市にまで到達したらしいと新聞報道があった。（※当時高麗山中にイノシシがいたかは不明）
- 12月8日 朝日新聞に「樹木園を荒らさないで」という見出しで要望文が掲載される。「樹木の名札

を壊したり指導標を引き抜いてすてたりしないでほしい」

12月19日 高麗山は鳥獣保護区、禁猟区になっているにもかかわらず、野鳥(※鳥種は不明)を捕獲していたとして、36歳の男性国鉄職員、30歳の男性工員を大磯警察署員3人の協力で現行犯逮捕した。

(昭和40年)

1月10日 高麗山北斜面(※亀掘沢付近か)に「かすみ網」が仕掛けてあるのを発見し、これを取りはずして、林業指導所へ持ち帰る。誰が仕掛けたかは人がいなかったのかわからなかった。後日「かすみ網」を中地方事務所の菅沼氏に引き渡した。

このように通常の業務の他に現在では全く廃絶した隠れた仕事があった訳である。担当者の苦労はいかばかりであったかと心中をお察しする。

VI おわりに

本報告では、過去の高麗山の出来事を中心に各テーマ毎に記録をもとに執筆をおこなったが、筆者著「神奈川県自然環境保全センター自然情報第2号「高麗山県民の森「森林植生変遷史」」と併せて読んで頂ければ高麗山の自然と歴史の奥の深さが尚一層御理解いただけると思う。高麗山中には随所に案内板を設置してあるので、更に高麗山に関心を持っていただけるものと確信する。最後に、「自然」に親しむ際のモラルの低さ等は、過去も現在もあまり変わっていないのには非常に危機感を覚える。今後益々、我々一人一人が「自然」に対する接し方、モラルの向上に取り組まなければならないだろう。過去の失態を繰り返さないためにも今一度過去の高麗山に起こった出来事を再認識する必要性を強調しつつ筆をおくことにする。

VII 謝辞

本報告にあたって多くの貴重な資料を提供して下さいました増子忠治氏に、この場を借りて、謹んで御礼を申し上げます。

VIII 引用・参考文献

- 神奈川県林業指導所(昭和34年3月)
- 昭和33年度林業指導所報告書
- 神奈川県林業指導所
- 神奈川県林業指導所一案内一
- 神奈川県林業試験場 1969. 3
- 神奈川県林業指導所のあゆみ
- 林業指導所
- 昭和39年度高麗山巡視日誌
- 増子忠治氏「野帳」(昭和38年~昭和40年)
- 神奈川県林業指導所
- 昭和33年度樹木園整備事業綴
- 神奈川県林業試験場 1978
- 林業試験場二十年のあゆみ
- 神奈川県林業試験場 1967
- 高麗山(パンフレット)
- 林業指導所
- キハダ植栽試験(昭和46年9月23日)
- 神奈川県林業指導所
- 高麗山植物目録 1967. 3
- 朝日新聞 1964. 12. 8
- 神奈川新聞「緑のとりで」3
- (昭和47年4月3日)
- 神奈川新聞「往還」5 ペテン山 日付不詳
- 神奈川新聞「参道のサク撤去」
- (昭和47年4月14日)
- 稲元書店 昭和41年
- 平塚大磯の歴史と伝説
- 高橋 光 郷土史研究会 昭和56年
- 大磯ふるさと紀行
- 高橋 光 郷土史研究会 平成3年
- ふるさと大磯探訪
- 鈴木 昇 大磯の今昔(一)
- 大磯町郷土資料館 平成5年
- 大磯の年中行事~豊かさへの願い~
- 大磯町平成10年大磯町史民俗調査報告書五
- 大磯の民俗(二)
- 一大磯・東町・高麗地区一
- かながわ風土記 平成10年1月第246号
- 高麗山神輿保存会20周年記念事業実行委員会
- ドッコイドッコイ20年高麗の山神輿

大磯町 平成8年3月

大磯町史1資料編 古代・中世・近世（1）

大磯町 平成11年3月

大磯町史研究 第六号

神奈川県立湘南青少年の家 1982

高麗山の植物目録

大磯町 平成5年3月

大磯町史研究第二号

大磯町 平成8年3月

大磯町史9 別編・自然